●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 28 年 西雲寺だより 冬号（49 号）

当山 御正忌報恩講のご案内

11月28日(月)～30日(水)

28日お逮夜(2時)
お初夜(7時)(武周お講)
29日お日中(10時)
大逮夜(2時)(御伝鈔)
お初夜(7時)(御伝鈔)
30日満日中(10時)

法話 福井 奥田順誓師
(29日より)

お誘い合わせの上
ご参詣下さいますよう
ご案内いたします

釈尊の生涯とその教え⑤

成道（覚り）

お釈迦さまは六年間にわたる苦行を棄て、尼連禅川（にれんぜんが）で沐浴（もくよく）し、村娘のスジャーターの乳粥の供養を受けて精気を取り戻し、菩提樹の根元の石にお座りになりました。ほどなくお釈迦さまは、六年間の修行の体験によって、すでに準備されていた正覚のときが熟しつつあるのを予感されました。いよいよ覚りの瞬間が近づこうとした時、悪魔の大軍がお釈迦さまのお覚りを妨げようとして攻めてきたのです。それは美女の姿をとり、軍隊の大軍などさまざまな姿をとって誘惑してきたのです。しかしその悪魔の正体は、外から来たのではなく内なる欲望や、さまざまな煩悩が姿をとったものであることを、内観の智慧によって明らかとなったとき、悪魔は退散したのでした。そして覚りの大自覚が静かに訪れました。お釈迦さまが菩提樹の木の根元の石に端座して、内観の瞑想に入られてから、成道（覚り）までに要した日時はわずか七日間であったといわれています。そのことは覚りに到るすべてが、六年間の苦行生活の間に用意されていたということです。ときにお釈迦さま三十五歳の十二月八日、満月の夜の明け方でありました。正覚に到達した「仏陀」の誕生です。仏陀とは「覚者、目覚めた者」という意味であり、正覚を成し遂げたお釈迦さまはこれ以後、釈迦牟尼（しゃかむに）仏陀と尊称され、それを略して釈尊とお呼びします。

正覚の内容

お釈迦さまがお覚りを開かれたということは、お釈迦さまの上に真実の智慧が実現し、闇が破れたということです。そしてそこに明らかになった覚りの内容は「縁起の理法」と呼ばれるものです。それは「此（これ）有るとき、彼（かれ）有り、此生ずるより彼生じ、此無きとき彼無く、此滅するより彼滅する」と説かれ、全ての存在するものは必ず因（原因）と縁（条件）との関係性において生じ、滅するもので、それ自体で存在するものはないというものです。

お釈迦さまは菩提樹の木の根元の石に端座されて、内観の智慧によって、老・病・死の苦悩の起る因縁を自らの内に深く内観していかれました。そして老・病・死の苦悩の因縁として生（しょう）が見い出された。人間としてこの世に生まれたことが老・病・死の因縁なのです。そしてその生は何によって生ずるかというと、三界流転（さんがいるてん）・六道輪廻（ろくどうりんね）の迷いの有り方が存在するからなのです。その迷いの存在の有り方は何によって生ずるかというと、それは「渇愛（かっあい）」によってである。渇愛とはあたかも渇いた者が水を求めてやまないように、欲望の満足を求めてやまない心であります。渇愛は何によって起るかというと、眼・耳・鼻・舌・身・意というすべての感覚器官によって起る。そして最後に、私たちを老・病・死によって苦しみ悲しませる因縁として「無明（むみょう）」にたどりついたのです。無明とは人間が智慧なきが故に真実に対して無知なることです。この無明が私たちの存在そのものに本来的にそなわっている生死苦悩の最後の因縁として見出されたのです。したがって、「無明あるによって老死あり、無明滅するとき老死滅する」と表現されます。これらの因縁は正確には十二支縁起といわれるものですが簡略化させていただきました。

梵天勧請（ぼんてんかんじょう）

覚りをひらいて覚者（佛）となられた釈尊は、その後なおしばらく、ウルベーラーの森に滞在されます。そのあたり一面に茂る巨木の根元に座ったり、森の中を歩きまわったりしながら、独り静かに偉大な覚りの喜び（法悦）を、くり返しくり返し味われたのです。しかし七週間にわたる法悦の後に仏陀は絶望の深淵に落ち込んでいかれたのです。それはみずからの正覚の意味を人びとに解き明かそうとすることについての絶望であったのです。

わたしが覚ったこの真理（縁起の道理）は、深遠で、難解であり、絶妙であり、微妙であって賢者のみがよく知る所である。それなのに世間の人々は欲望のままに楽しみ、嬉しがっているだけである。このような人々には縁起の道理は受け入れ難く、私が教えを説いたとしても受け入れ難く、私には疲労があるだけである。

釈尊はこのように考えられ、教えを説かず、一人静かに涅槃に入ろうと思われたのです。涅槃とは迷いの尽きた世界のことです。つまり仏はわが身一人覚ったまま、人に法を説かないでこの世を終わろうかと思

われたのです。この説法不可能という絶望感が仏陀の胸のなかにきざしてきたことを知った娑婆世界の主である梵天という神が仏陀の前に現われて説法を勧請したのです。

尊きお方、世尊
願わくは法を説きたまえ
善逝、願わくは法を説きたまえ
この世間には塵にくもらされることの少ない人びともおります。
けれども彼らとても法を聞かなかったならば
滅び衰退してしまうに相違ありません
しかしこの世間には法を了解する人々もありましょう

一度ならず、二度、三度と梵天は説法を懇願しました。三度目の懇願を受けた釈尊は世の中を観察された上で、ついに世の苦しみ悩む人々へ法を説くことを決意されたのです。娑婆世界の主である梵天が釈尊に説法を勧請したということは、一切の人々が釈尊の説法を求め願っていることを表しているのです。その一切の人々の願いをうけて釈尊はみずから覚られた縁起の法を説くことを決意されて立ち上がられたのです。

初転法輪（しょてんぽうりん）

釈尊の最初の説法は、釈尊が出家した直後に教えを受けた二人の仙人に対してなされようとされました。しかし、すでに二人の師はこの世を去っていました。そこでかつて苦行生活をともにした五人の仲間に対して正覚の真実を説法しようと、かれらをさがし求めた釈尊は、かれらが宗教都市ベナレスの町はずれ鹿野苑（ろくやおん）で修行に励んでいることを知って、ベナレスに向かわれました。仏伝によると、釈尊が五人の仲間に近づいていったとき、かれらは苦行をすてた釈尊のことを

ゴータマは苦行を捨てて
堕落した者である
ゴータマは贅沢で努力することを怠り
奢侈（しゃし）に走った者である

と非難し、釈尊が近づいてきても挨拶もせず無視しようと申し合わせました。しかし釈尊が近づくにつれ、かれらは約束を守れず、かつて苦行をともにした仲間として出迎え、「友よ」とよびかけずにはいられなかった。ところが「友よ」とよびかけた仲間に対して、釈尊は

比丘たちよ、如来に対して名前で呼びかけてはいけない、また「友よ」などと呼びかけてもいけない。如来は供養を受けるにふさわしく、正しく覚った覚者なのである。比丘たちよ、法を聞く耳を用意しなさい。わたしは不死の法を獲得したのである。

と厳然として、みずからが「如来」であることを宣言し、かれらに対し説法を開始したのであります。そこには、仏陀となった釈尊みずからの真実に対する確信がうかがえます。みずからを「如来」である。すなわち「真実の世界（如）からやって来た者」であるという、この最初の説法における宣言こそ、説法に踏み切った釈尊のなみなみならぬ決意があらわれているのです。釈尊は五人に向かって説かれました。

この世に生まれてきた限り、人間はすべて老い、病み、憂い、死ぬものである。何故か、この世に存在するものは、すべて因縁によって生まれ、因縁によって移ろい、変ってゆくものだからである。今までの姿でいたいとどんなに願ってみても、所詮、それは無理なのである。にもかかわらず、ある人はその無理なことにしがみついて、あくせくし、もだえ、悩み、愚かな迷信にすがりついている。他の人々は今だけの瞬間的な快楽に身をゆだねている。これはどちらも悩みや煩いを深めるだけでしかない、人間が本当の幸せに到達する道、それは縁起の道理にめざめ、あらゆるものに対する欲望を捨て、自分自身に対する執着をさえも捨てて、清らかに生きることである

五人の比丘は釈尊から真実の法を聞き続けた。そして五人の比丘は次々と縁起の法に目覚めていったのです。そして目覚めた人は釈尊を含めて六人となりました。このように法が広まっていくことを、車輪が回転する様子にたとえ転法輪といい、特にこの鹿野苑での最初の説法を初転法輪と呼んでいます。ここに目覚めた人（仏陀）、真実の教え（法）、仏の教えに感動し、歩みを始めた人の集い（僧）の三宝がそろい教団が成立したのです。

（住職）

佛光寺第30代歓喜光院殿真承上人の御長子

渋谷 覚（法名釋真覚）様

法嗣（新門）にご就任

写真は本山佛光寺のホームページより

法嗣御得度式に参列して

筆頭総代　末定育雄

十一月四日午後一時、法嗣御得度式の始まりを告げる喚鐘が鳴り響き、雅楽が流れて全員が合掌、念仏申す中、御門主がご出仕されました。その後、大師堂の照明が消されて蝋燭の明かりだけになる中、厳粛に御得度式が執り行われました。

続いて、真承上人の御祥忌法要が、新門主様を導師として営まれました。御門主様は御挨拶にて法灯の継承を願われ、新門主様は法灯の継承を新たに決意されました。そのお姿を拝見していて、仏光寺派の輝かしい未来を感じることが出来ました。

又、この法灯を守るためには、私たち門徒にも大切な役割があると思います。それは、お念仏と向き合っていくことだと思います。私は、この荘厳な仏光寺派の法灯継承の儀式に出席させて頂き、約七〇〇年脈々と受け継がれ守られてきた重さに、心うたれました。このような貴重な経験をさせて頂き、誠に有難うございました。

前筆頭総代・吉川芳弘氏のご尽力とご功績をたたえて

表彰状

吉川　芳弘殿

あなたは当院の筆頭総代として念願であつたお内陣を修復し宗祖親鸞聖人七五〇回大遠忌をつとめるなど寺門の興隆に大いに尽くされました　ここに院号法名を贈り甚深の謝意を表します

平成二十八年十月十八日
西雲寺住職　護城一善

報恩講にて表彰式が行われました

御正忌報恩講をつとめる

御正忌報恩講は宗祖親鸞聖人の御正当（祥月命日）に当る十一月二十八日に合わせてつとまるものです。そして、親鸞聖人の御往生をとおして、九十年のご生涯をいただいていくのです。

聖人は弘長二年（一二六二）十一月下旬のころから身の不調を覚えて病臥し、弟尋有の善法院において、十一月二十八日、ついに九十年の生涯を終えられたのです。『御伝鈔』には、聖人のご臨終を

口に世事をまじえず、ただ念仏のふかきことをのぶ、声に余言をあらわさず、もっぱら称名たゆることなし、しこうして同じき第八日午の時、頭北面西右脇に臥し給いて、ついに念仏の息たえましましおわりぬ

と示されています。世の中のことは一切口にせず、もっぱら称名念仏して、仏恩の深いことを述べて、ついに念仏の息がたえたときがご臨終であったのです。深い人間業の生涯を、本願念仏のなかに燃焼して、お浄土へ還られたのです。聖人をとり囲んだ家族やお弟子の悲しみはいかばかりかと察します。

其（それがし）親鸞閉眼せば　賀茂川にいれて魚にあたうべし

愚禿釈親鸞と名告り、在俗のまま妻子とともに一庶民として、深い人間業を生きられた聖人にとって身に対する執着はなく、如来の本願をいのちとし、心はすでにお浄土にあったことと思われます。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく察すれば、ひとえに親鸞聖人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ（歎異抄）

このおことばは、聖人のお弟子で『歎異抄』の著者である唯円房が、聖人のつねのおおせとして書きとどめて下さったものです。そして唯円はこの聖人のことばに引きつづいて

されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪悪のふかきほどをも知らず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり（歎異抄）

と聖人のおことばをいただかれ、わが身の自覚のいたらなさを深く歎いておられるのです。私たちも聞法をとおし罪悪深重の身に目覚め、如来のご本願を「私一人がためなり」といただかせていただいて唯円のあとにつづかせていただきましょう。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

（住職）

秋を想う

松手入れひと声掛ける友老る
青空に走る声援 運動会
赤萩や思ひ出せぬと立ち話し
菊香る仏壇の天煤びかり
石蕗の花読経溢るる大御堂

本保次作

お手継ぎの寺の聴聞すきま風
旅したき心たかぶり石蕗の花
菜の三把洗ひて暮れの早さかな

田中とめ女

（平成十九年句集より編者抜粋）

歓迎♪

除夜の鐘つき

12月31日23：40～

どなたでも

ぜひお参りください

発　行

真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）

住職　護城一寿
筆頭総代　末定育雄
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。